

美學の基礎に就ての考察 (承前)

深田康算

十

上述の如くであるからして、言語形像が美的たり得るか否かの問題は、言語の具象性の問題ではなくして意味の問題である。言語が美的價値を有し得るか否かは、それが具象的觀念を喚起すか否かと云ふ點に依つて決せらるべきでなくして、言語が言語として其自ら意味を有するか否かに依つて決せらるのである。

然しながら、言語が言語として其自ら意味を有すと云ふことに就ては、尙十分に明らかにして置かなければならぬ事がある。何故ならば、言語が言語として(即ち感覺像として)他の經驗の代理者たり得ること、若しくは語や文章が一々他の經驗に關係せしめらるゝ必要なく、其自ら丈けで理解され得ることは、必しも美的領域にのみ限られた現象ではない。其故に言語が(前節に述べた如くに)單に其自ら理解さるゝこ

と、其自ら一つの獨立せる系列となること、即ちさう云ふ意味に於て、其自ら意味を有すると云ふ丈けでは、實は未だ其美的價値の根柢を規定することは出来ないのである。之れを規定する爲めには、美的意味の領域と依他的意味の領域との孰れに於ても、他の經驗の代理者たり而して其自ら意味を有するに拘はらず、兩者の間に異なる所のあると云ふ點を明らかにしなければならぬ。而して之れを明らかにすることは左程困難な事ではない。今、依他的意味の領域に於て言語が感覺内容の代理者となつて居る場合を考へて見るに、其場合に於ては、諸種の意味に解釋され得る經驗が言語に依つて或一定の目的に基いた一つの意味に限定されるのであることを、吾々は先づ注意すべきである。尙詳しく云へば依他的意味の領域に於ては、或感覺内容を或一つの言語が代理すると云ふことは、其感覺内容が解釋され得る諸種の意味の中、或一定の意味丈けを取り出して、之れを其言語が代理すると云ふことなのである。感覺内容其自らを言語が代理して居るのでは無くして、云はゞ感覺内容の持つ居る多くの側面の中の一側面を言語が代理して居るのである。而して其一面は依他的意味の領域に屬するものなのである。例へば醫者が其専門的職業的立場から物を見る際には、顔面に現はれて居る赤色の點は直ちに或病氣の症狀として解釋され

る。而して『勞症』と云ふ言葉は、其場合此感覺内容の完全なる直接的なる代理者となる。換言すれば、此言葉は自ら理解され、其自ら意味を有すと云へる。然しながら斯くして代理者となつた言葉は、其故に感覺内容の依他的意味に基く解釋の多くのものの中の一を意味し、而して其れを代理するのである。其れと同じ様に總ての言葉は皆盡く、一方に於ては其れが代理する經驗を意味する、そして其れの代理者として立つて居る。さう云ふ意味に於て言語は其自ら意味を有して居ると云ひ得るであらう。然しながら、他方に於ては、此の如くに或經驗の代理者たる言語は皆或一定の意味領域に屬して居り、而して言語其ものは其自ら意味を有して居るのでなく、其れが屬する所の意味領域に依つて始めて意味を與へられて居ると云ふべきである。此の如き關係に立つて居るのであるからして、言語其自らが意味を有し得るか否かの問題換言すれば、言語形像が美的價值を有し得るか否かの問題は、言語が如何にして他の經驗の代理者たり得るか、如何にして感覺内容たり得るか若しくは言語が如何にして、感覺内容を代理し得るかと云ふ點ではない（言語が感覺内容たり得ること、感覺内容を代理し得ることは最早問題とはならないのである）。寧ろ言語其ものが如何にして其自ら意味を有し得るか、と云ふ點である。言語が言語として、一々他の

經驗に關係せしめらるゝ必要なく、其自ら丈で理解さるゝと云ふことは、嚴密に云へば決して言語其自らが意味を有すると云ふことではない。それは單に言語が其自ら感覺内容たり得ると云ふ事に外ならぬのである。感覺内容なる言語が、如何にして感覺内容として其自ら意味を有し得るかと云ふに至つて始めて、言語に美的意味ありや否やの問題となるのである。

夫れであるからして、言語が依他的意味の領域に於て其自ら意味を有すと云ふことと、言語が感覺内容として其自ら意味を有すと云ふことは、決して同じ事ではない。此點を吾々は特に注意すべきである。言語が或經驗を直接に完全に代理し得ること(即ち大まかに云ふ其自ら意味を有すること)は、依他的意味の領域に於ても有り得る。然しながら、それは言語が感覺内容を直接に代理する若しくは感覺内容であると云ふことに過ぎないのであつて、感覺内容たる言語が其自ら意味を有することではない。尙平易に之れを云へば、言語が其自ら意味を有すと云ふとき、此云ひ表はしには、二種の意義が含まれて居るのである。即ち一方に於ては、言語が其代理する内容を直接に示して居り、吾々が一つの言葉を聞くや否や直ちに之れを其内容の代理者として捕捉することが出來、従つて一々此記號たり代理者たる言葉を其内容たる

或經驗に關係せしむる必要を感じない時、之れを指して、言語が其自ら意味を有すと云ふのである。即ち言語が其自らとして理解されることを指して云ふのである。而して他方に於ては、言語が此の如くに直接に理解される、や否やに拘はらず言語が其自ら意味を有する場合、換言すれば依他的意味に基く解釋の下に全然置かれることなき場合、之れを指して又吾々は言語が其自ら意味すと云ふのである。即ち第一の意味で云ふ所のものは、言語が或一つの依他的意味を直接に代理して居る、其代理の仕方が直接的であると云ふに過ぎない。而して第二の意味で云ふ所のものは、總ての依他的意味から離れて、言語形像たる感覺内容が其自ら意味を有すと云ふことなのである。其れであるからして、言語が美的形像たり得る爲めには、勿論其自らとして理解される必要がある(即ち第一の意味に於て、其自ら意味を有すと云ふことが必要である)に相違ないが、併し其丈では足りないのであつて、其理解が依他的意味の領域に基かず、其自ら意味を有する領域に屬すること、即ち第二の意味に於て、其自ら意味を有すと云ふことが必要なのである。此二様の意義を區別するならば、言語は如何にして其自ら意味を有し従つて美的形像となり得るかの問題が何に依つて決せらるべきかは自ら明らかになるであらう。別の言葉で云へば、總ての言語

は盡く皆依他的意味を有する。依他的意味を含まない所の言葉なるものを吾々は考へることが出来ない。然るに言葉が依他的意味のみを有して居る限りは、美的意味を有し得ないのである。假令言語が直接に其自らとして理解され、そして其故に其自ら意味を有すと云ひ得るに拘はらず、其がやはり依他的意味に基いて與へられた意味である限り、如何に言語と内容との關係が密接であるとしても、其に基いて言語が美的形像たり得べき理由は生じない。其れ故に然らば如何にして此依他的意味を無害ならしめ得るであらうか、如何にして吾々は言語に必然含まれて居る所の此依他的意味を美的意味に取つて煩ひとならぬ如くに爲し得るであらうか、而して如何にして感覺内容たる言語其ものが其自らとして意味を有することを可能ならしめ得るであらうか。之れが問題なのである。

而して此如くに問題を明瞭に且つ嚴密に云ひ表はして見れば、此問題は獨り言語に就てそが如何にして美的形像たり得るやの問題たるのでは無く、實は總ての感覺内容に就て、即ち視覺像にせよ、聽覺像にせよ、或は又觸覺像にせよ、其等が如何にして依他的意味から游離し其自ら意味を有する美的形像となり得るかの問題に外ならぬことを吾々は發見する。何故ならば總ての感覺内容は、やはり言語と同様に皆盡

く依他的意味を含んで居ると云へる。そして或特別の場合に依他的意味から離れて其自ら意味を有し得るのである。其故に此問題は美學に取つての一般問題なのである。吾々は先づ此一般問題を意察して然る後に再び言語に就ての特殊問題に戻らうと思ふ。

十一

總ての感覺内容 *Wahrnehmungsinhalte* は概して之れを云へば皆諸種の意味に解釋せられ得るもの、即ち多意味的若しくは多義的 *Vielfachig* なるものと考へ得る。事實殆んど總ての感覺内容は夫々種々なる意味領域に屬せしめられ従つて色々の意味を有して居るのである。而してさう云ふ多意味的なる感覺内容が或一つの意味のみを有するものとして概念的に規定されるのは、夫々の意味領域の孰れか一つに屬すと見られるのに基く。其故に一つの感覺内容を或一つの意味のみを有するものとして一意味的若しくは一義的 *eindeutig* なるものとして規定する爲めには、其れが如何なる一つの意味領域に屬すと見られたのであるかを明らかにしなければならぬ。例へば樹木なる感覺内容は之れを解釋する所の意味領域の立場が種々あり得

る如くに、多意味的である。其故に樹木を或一つの而して唯一つの意味を有するものとして一意味的に規定する爲めには、如何なる立場から見ても意味なのであるか如何なる意味領域に於て云ふのであるか、之れを先づ記述すべきである。換言すれば多くの他の領域及立場に對して、此一つの意味を規定する特殊の領域なり立場なりの區別を明らかにしなければならぬ。其れと同様に、一つの感覺内容を美的意味を有するものとして、美的意味のみを有するものとして、即ち美的形像として一意的に規定し記述する爲めにはやはり孰れの一つの立場から云はるのであるかを明らかにする必要がある。而して美的形像に就て斯かる一つの立場を明示する爲めには其故に、總ての依他的意味の領域から異なる立場であること、換言すれば、美的形像が總ての依他的意味から隔離せらるゝ所以を明らかにしなければならぬ。――附記するも迄なく、總ての學術に就ての考察は、其各科の學術が取扱ふ所の諸種の概念が如何にして構成さるゝかの考察を其基礎としなければならぬ。美學の基礎に關する考察に於て、美的形像なる概念が如何にして多意味的なるものゝ中から一意的なるものとして規定され得るかを闡明するのは、其れであるからして、總ての學術の概念構成の原理に就ての考察法を美的意味若しくは美的形像に向つて應

用するのに外ならないのである。——吾々は先づ如何にして美的意味が總ての依他的意味から游離し得るかを見よう。

例へば一つの感覺内容は化學的にも醫學的にも法律學的にも又は精神病理學的にも解釋され得る。而して斯く色々に解釋され、色々の意味領域に屬せしめられ、色の意味を持ち居るのは、感覺内容を考察する立場の相違に基くのであつて、是等の立場を吾々は職業的専門的立場 *Beruf* と呼ぶことが出来る。即ち感覺内容が依他的意味を有するのは、職業的専門的立場に基くと云ひ得るのである。其れであるからして、感覺内容が其自ら意味を有し得る爲めに必要なことは、先づ第一には此の如き職業的専門的立場から離れ得ること *Berufsfremdheit* である。職業的専門的立場から物を見ない場合に、感覺内容其自らの意味が注意に上り來ることは、多くの事實が之れを示して居る。都會の人士に取りて、田園が美的に見らるゝ如き、器械や工場が素人に依り又畫家に依りて美的形像と見られ得る如きは其れである。又逆に藝術的作品が専門家なる藝術家や藝術史家等に依つて藝術的美的には見られぬこと、多い事實も自ら此點を證明して居る。職業的専門的立場を離れることは、其故に、感覺内容其自らの意味の現はれ來る爲めに必要であると云ふことが出来る。而して、

吾々の生活は何等かの意味で職業的専門的なのであるからして、日常生活の中止、即ち祭日や休日は、職業的立場から吾々を游離せしめる。安息日や遊戯の態度が美的觀照的態度に類似するのは斯かる理由に基く。此の如くに職業的立場からの游離が、吾々をして感覺内容其自らの意味に注意せしめるのは、畢竟吾々の興味を或一定の依他的意味に基ける方面に限定する所の諸條件が取除かれるのに據るのである。換言すれば、依他的意味の領域から隔離さるゝことに依つて、感覺内容其自らの意味が現はれ來るのである。而して其所からして考を進めるならば、職業的立場からの游離以外に、尙其の如き隔離を可能ならしめる諸種の場合のあることが明らかになる。即ち第二には、一つの感覺内容を他の總ての感覺内容から全く隔離し孤立せしむる如き環境若しくは背景の下に置くこと *isolierende Folierung* に依つて、第三には、一つの感覺内容を環境若しくは背景から少しく際立たせること *heraushebende Isolierung* に依つて、而して第四には、一つの感覺内容と他のものとの間に境界線を劃すること *abgrenzende Isolierung* に依つて、夫々或一つの感覺内容を隔離せしめ、従つて其自ら意味を有するものたらしむることが出来る。

孤立に依れる、隔離とは、例へば宗教上の儀式を寺院から引き離して寄席の舞臺の

上に演ずる場合の如きである。寺院に於ては儀式は云ふ迄もなく宗教的意味を有するものであつて、儀式其ものゝ形像は形像として注意され無いのが常態である。舞臺の上に演ぜらるゝに至つて、始めて儀式は依他的意味の領域から隔離され、儀式として形像として吾々の注意に上るのである。一體總ての依他的意味を有する感覺内容は、同一の依他的意味を有する他の感覺内容を環境として現はれるのが常であり、さう云ふ一定の環境の中に置かれた一つの感覺内容は其全體の一部として意味を有して居るに過ぎぬ故に、其自ら特に意味を有するものとしては注意されないが普通である。特に其自らとして注意されるゝことが若しあるとすれば、其は單に偶然に依るか、若しくは、之れを注意する者の會有して居る興味に依るかなのであつて、感覺内容其自らには斯かる注意を喚起すべき何等の理由が含まれては居らない。上の例で寺院に於ける宗教上の儀式が形像として其自ら注意されるゝことがあるのは此の如き場合である。然るに之れを其環境から隔離して、全く之れと關係なき背景の下に孤立せしめるならば、其所で始めて、此感覺内容は其自らとして吾々の注意を喚起し吾々の注意に上り來るであらう。孤立に依れる隔離が此の如くに、感覺内容をして其自ら意味あらしめると云ふ點に基いて、劇場や美術館や演奏堂の如き設

備の役目が理解される。然しながら勿論單に孤立せしめ隔離せらるると云ふ事丈
けでは、必しも感覺内容其自らが意味を有し來るとは云へない。孤立せしめ隔離せ
らるることが必要なのは、其自らの意味が注意せらるゝ爲めに必要なのである。其
故に若し一つの感覺内容が其當然の環境から隔離され、新たなる異種類の環境の中
に孤立せしめらるゝ時、其自らの意味が注意されずして、其新たな環境との關係が
注意さるゝならば、而して恐らくは、其關係の不似合なることが注意さるゝならばそ
は依他的意味に基いた解釋であつて、美的形像の捕捉ではあり得ない。尙嚴密に云
へば此の如き場合に於ては畢竟實は孤立に依れる隔離がないのであると云へる。
環境若しくは背景から孤立して隔離するのでなくして寧ろ環境若しくは背景と關
係せしめられ客觀的空間的に一つに結合するものと見られ、而して其結合が不合理
であると判斷せらるゝのである。其故に孤立に依れる隔離は、其自ら意味を有し得
る如き感覺内容をして、始めて其自ら意味を有することを得せしめるのである。換
言すれば色々の意味に解釋し得る従つて其自ら意味を有するものとしても解釋す
ることの出来る如き感覺内容が、始めて孤立的隔離に依つて美的形像となり得る。
一定の依他的意味の下にのみ解釋される如き内容は之れに依つて美的形像となる

ことは出来ない。さう云ふ内容は即ち孤立し得ぬ隔離され得ぬ感覺内容と呼ぶべきであらう。

上述から明らかである如く、孤立的隔離に依て感覺内容其自ら意味を有し來るのは、其環境若しくは背景に對して孤立の關係に立つと云ふことではなく、實は全く如何なる關係にも立たぬと云ふことである。其故に孤立的隔離の最高形式若しくは理想的なる場合とも云ふべきは、環境若しくは背景が全く排除されて居る場合、例へば觀客席を暗くして舞臺のみを明るくする如き又は繪畫を懸ける壁を一樣なる黒色若しくは灰色とする如き場合である。手を握つて遠眼鏡の如くにして風景を見或は節穴から覗いて見るのも之れと同様の結果を生ずる。斯くして完全なる孤立的隔離に依つて、或一つの感覺内容が其自らとして意味を有し來る。此點からして次の事も亦自ら明らかになるであらう。即ち多くの美的形像が同時に與へられる場合には、其一つ一つの形像は自らの意味を失ふ。例へば寄席などに於て雜多なる形像が連續して提供せらるゝ如き、又は美術館や展覽會に於て無數の作品が陳列せられて居る如き場合に於ては、孤立的隔離の制約が破壊さるゝ爲めに、其一つ一つの形像や作品が互に相殺するの結果を生ずるのである。

際、立たせることに依る、若しくは優位に依る、隔離は、上述のものとは少しく趣を異にする。此場合には、感覺内容は其日常的環境の中に其儘置かれて居るのであつて、唯其周圍から少しく際立たしめられることに依つて、其自らとして注意を引くのである。例へば一人の人が周圍の人々よりも一段高い所に立つたならば、感覺像として兎に角周圍の人々よりも大なる意味を有するのであらう。而して其意味は尙其丈けでは勿論云はゞ無方向であるが、其人と周圍の吾々との間の關係が多少斷ち切られて居る點から云へば、其自ら意味を有するものの方向へ向つて一步近よつたものと云へる。吾々が彼に近より得ないと云ふ點丈けで、彼は已に依他の意味の領域から隔離して、其自ら意味を有するものとなつて居るのである。劇場に於て、舞臺が觀覽の爲めには或は少しく不便を生ずるに拘はらず、高くせられるのは此故である。彫刻の臺坐の有する役目も亦此の如き隔離を可能ならしめる爲めに外ならない。同じ理由に依つて、武器や陶磁器なども之れを壁に懸け又は臺の上に置かれるならば、生活の必需品として、考へられる代りに、美的形像として眺められるのである。終りに境界線に依れる、隔離とは何等かの方法に依り環境との境界を單に注意せしめることに依りて、一つの感覺内容を其環境から游離せしめ、斯くして其感覺内容

に其自らの意味を有せしめることである。例へば額椽に依つて一つの視覚像を周圍から區劃する如き、柏子木や振鈴に依つて幕の終始を劃する如きも、畢竟此類に屬すと云ひ得る。是等の境界線は區劃内のものを區劃外のものから隔離する役目を持つて居るのであり、其れに依つて吾々の注意は、區劃外なる環境に對する如き云はば強い興味から開放されて、區劃内のものに向ひ、一つの感覺内容の其自ら有する意味に注意するやうになるのである。

右述べた如くに、依他的意味の領域から隔離されたものとして、美的形像を記述することに依りて始めて美的形像を一意味的 *eindeutig* に規定することが出来る。之れに依つて、感覺内容が美的意味なる一つの意味を有するものとして見らるゝ一定の立場を、他の多くの立場から區別することは出来る。多意味的なる感覺内容が一意的に、而て此場合に於ては美的意味を有するものとして見らるゝ所以は明らかになつたのである。然しながら右に述べた所は斷はる迄もなく、單に如何なる場合に依他的意味が無害となり得るか、如何なる場合に依他的意味を含む所の感覺内容が、其れにも拘はらず、其自ら意味を有することの出来る條件の下に置かれるかと云ふ點である。前に云つた如くに、色々の意味に解釋され得る所の従つて其自ら意味

を有するものとしても解釋され得る所の感覺的内容が依他的意味からの隔離に依つて其自ら意味を有するのであり、而して右に述べた所から、此の如く色々の意味に解釋され得るものが如何にして依他的意味から隔離し得るか、明らかなになつたのである。其れであるからして、右に述べた所は如何なる感覺内容も其れが美的意味を有し得る爲めには、其下に置かれなければならぬ條件を規定したものである。つて、云はゞ美的形像が可能たり得る爲めの條件に止まる。如何なる感覺内容も之れに従ふ時美的形像たり得る條件ではあるが、如何なる内容が必ず美的形像とならなければならぬかを規定するものではない。換言すれば、依他的意味からの隔離は、一つの感覺内容をして當然其自らの意味に於て注意さるゝ様にせしめ、他のものとの關係に於て見らるゝことから隔離せしめる。併し斯くして其自らとして注意せられたものは、必しも常に其自ら意味を有すとは限らないのである。寧ろ時としては斯かる注意を假せぬもの、即ち其自ら意味を有せぬものとして曝露するであらう。美的形像は依他的意味から隔離されたものゝ中に無ければならぬけれども、依他的意味から隔離されたものが盡く皆美的形像であるとは云へない。

然らば如何なる感覺内容が必然其自ら意味を有しそして美的形像たるのである

か。

十一

前節に於て吾々は總ての感覺内容は殆んど皆多意味的 *vielfachig* であると假定し、種々なる依他的意味に解釋せられ得ると共に、其自ら意味を有するものと見られ得ると考へた。そしてさう云ふ多意味的なるものが、一意味的なるものと規定せられ得る所以は、即ち特殊の一つの意味領域の立場に據るのである故に、美的意味なる一つの意味を有する美的形像を規定する爲めに、此特殊の意味領域が他の立場と異なる點を闡明したのである。併し感覺内容の諸種を嚴密に検査して見るならば、殆んど總ての場合に於ては感覺内容は多意味的であると云ひ得るに拘はらず、或種の感覺内容は(必然的には云へない迄も)少くとも一般的には或一定の意味を有して居る即ち一意味的 *eindeutig* に確定して居ることを發見する。例へば器械は器械として一定の意味を有して居り、潰傷は潰傷を意味して居り他の意味に解釋せらるゝことがない。其故に此の如き一意味的なる感覺内容を數へて、一定の概念的意味に相當する對象の種類を列擧することが出来るのである。換言すれば總ての感覺内

容は隨意の一つの意味領域に屬せしめられ得るのでは無くして、一定の感覺内容は（少くとも一般的には）必然に或一定の意味領域に屬すと見られなければならないのである。さうすれば美的意味領域に必然屬する所の感覺内容も亦無ければならぬと云ふことになる。而して若し此の如き感覺内容があるとすれば、それは即ち必然其れ自ら意味を有するもの、美的形像たるものであるに相違ない。

之に於て問題は、美的意味のみを有する所の感覺内容なるものがあるか、全く依他的意味を含むことなき感覺内容とは如何なるものであるかと云ふ點に移る。若し此の如き感覺内容があると、而して其内容が如何なる原理に基いて美的意味のみを有して居るのであるか如何なる條件の下に其自ら意味を有する形像となつて居るのであるかが明らかにせられ得るならば、其所で始めて吾々は美的形像を組織的に記述することが出来るであらう。然しながら已に述べた所からして、美的形像は感覺内容として已に依他的意味に基く對象とは異なりたる感覺内容であることが明らかである。其故に唯美的意味のみを有する感覺内容があるかと問ふ代りに、吾は寧ろ同じ感覺的所與が與へられて居るに拘はらず、其れが依他的意味に基いて解釋せられず、必然的に美的形像として、即ち其自ら意味を有するものとして捕捉さ

れなければならぬのは何故であるかと問ふべきである。如何なる條件が必然的に(美的意味のみを有する)美的形像をして依他的對象と異なりたるものたらしめるか、此條件は二様でなければならぬ。即ち一方に於ては、依他的意味の排除、他方では其自らの意味の高調である。依他的意味の下に解釋さるゝことの不可能(即ち前に云つた隔離ではなくして、排除は其自ら意味を有するものとしての感覺内容に吾々の注意を向けしめるに相違ないが、吾々をして全く之れを度外視せしめることもあり得る。其自らとして吾々の注意の下に置かれたものが、又自らとして意味を有し得る爲めには、其自ら有する意味が高調せられることを要する。即ち感覺内容が其自らとして強い印象を與へる所の要素を有し、且つ全體として固い結合を示して居ることを要する。此二様の條件を吾々は一方を隔離的(排除的)、他方を集注的(強勢的)と名づけることが出來やう。兩者は消極的と積極的との差異はあるが、共に美的形像が其自ら意味を有する感覺内容たる爲めに、必要なる條件である。

感覺内容に就ての現象學的記述の立場から——即ち感覺内容を吾々に與へると考へらるゝ對象や、又感覺内容を受け取ると考へらるゝ吾々の精神作用を問題外に置いて——吾々に次の如くに美的形像の諸條件を考察し得るであらう。(未完)